

『フォーラム第5号』に寄せて

所 一彦

全カリは間もなく施行3年を終える。教務的なことはだいぶ固まり、ルーチン化した部分が多くなった。しかしそれは表面に過ぎず、内実はまだ固まっていない部分が大きく残っている。できかけの目次を見て、改めてその感を深くした。

総合教育は、その本体である「総合A」の中身の改革がこれからである。分野間のアンバランスを是正しつつ新分野を拓くための枠組がやっとできて、これからその中身を詰める。この種の作業は言語教育では最初に行われたが、総合教育では後回しになった。それは一つには、前者が拡大しながらの改革だったのに対し、後者が縮小しながらの改革だったことによる。総合教育でも、拡大できた「総合B」は目ざましい発展を遂げている。全体としては、総合教育は難儀だった。卒業に必要なとされる単位数は減り、それに応じて、展開されるコマ数も減った。できたのは、1科目4単位が原則だったのを2単位にして各科目のテーマ性を高めつつ全体としてのヴァリエティティーを豊かにし、一方、シラバスを詳しくして外から見やすくすることだった。学生はその中から、以前より少なく、以前より自由に喰い嘔じる。それでどうして「総合」教育になるか。シンポジウムはどう答えてくれたか。

教育内容の改革は、何よりも個々の授業の改革である。それにはカリキュラムもさることながら、FDや授業評価が重要である。授業評価は、いうまでもなく担当者自身が行うが、それだけでは独善に陥りやすく、教員間の相互評価や学生による評価も重要である。教員間の相互評価は、複数の教員が同席する総合Bのような場合を別とすれば、教員が互いに他の教員の授業をよく知らないため頼りにならないことが多い。授業をよく知っているのは、ほかでもない学生である。受益者も学生である。全カリ改革が受益者たる学生の視点に立つ改革だったとすれば、その射程に、学生による授業評価が入らない筈がない。現に言語教育の一部では、学生にアンケートで授業評価をさせる試みが既に行われている。他大学でも拡がりつつあり、わが総合教育も無関心でいるわけにはいなくなった。

言語教育では教育内容の抜本的な改革が逸早く行われた。しかしそのために、改革に携わる研究室がトップダウンで構成され、カリキュラム運営から疎外された専任教員を多数生むことになった。全カリ運営組織のこの「非民主的」なあり方は、改革期には止むを得ないものとして容認されたが、改革が軌道に載ればは正されざるを得ない。私のエッセイは、主にこの問題を念頭に書かれている。

(ところ かずひこ 全学共通カリキュラム運営センター部長)